

「亡き人との関わりに生きる ー金光大神に見る死生への問いー」

金光教教学研究所所員 高橋昌之

一、はじめに

教学研究所の高橋です、どうぞよろしくおねがいたします。

今日のテーマは「亡き人との関わりに生きる ー金光大神に見る死生への問いー」といたしました。今回のお話は、今年の紀要に掲載した研究をもとにしていますが、これは金光大神が養父親子や子供達などを相次いで亡くしたことに注目した研究です。そこでまず、私がこのような事を考えることになった背景からお話ししたいと思います。

私はこれまで4本の紀要論文を書かせて貰いましたが、最初の論文のテーマは、直信達が金光大神の死をどう受け止めたのか、というものでした。今回の論文では金光大神が家族の死を受け止める経験に注目したので、いわば初めの論文と今回の論文は裏表の関係になります。両論文に共通するのは「人の死をどう受け止めるか」という関心です。私はこれまで他のテーマでも研究してきたのですが、人の死に対する関心はいつも心のどこかにあったように思います。



私は今年で42歳になりますが、これまで親戚や友人、あるいはお世話になった先生方など、いろいろな人の死に出合ってきました。上記の関心がどこから来たのか考えるとき、そうした方達のことや世間で起きた事件などが色々と思い返されるわけですが、とりわけ私の中で外せない事として中学生時代の思い出があります。

中学3年生の夏休みに、仲の良かった一つ上の従兄が交通事故で亡くなりました。8月のある日、九州に住んでいた従兄が車にはねられたことを知らせる電話があり、母と私と弟の3人は夜行列車に飛び乗って福岡へ向かいました。しかし私たちが病室に到着したとき、目の前にいたのは既に脳死状態で人工呼吸器を付けられたままベッドに寝ていた従兄の姿でした。それから数日後に従兄は亡くなったのですが、まだ温かい彼の体に触れていると死んでいることが受け容れがたく、現実感が全く湧きませんでした。

実は同じその年に父方の祖母も亡くなっていたのですが、天寿を全うしたと思えた祖母と、事故で突然亡くなった従兄の場合とでは、同じ身内の死でも私の中で全く違ったものとして心に刻まれました。その時の感覚は心の中に棘が刺さったように、折に触れて思い起こされる出来事になっています。このことを常に意識しているわけではありませんし、それのみが研究に向かう動機となっているわけでもありませんが、私の関心の根っこにあることは間違いのないと思います。



いま私個人のことを述べてきましたが、人の死をどう受け止めるかという関心は、今日の社会にも広く見られると思います。たとえばかつての日本では人生の終わりを自宅で迎える人が大多数だったといわれますが、今日では病院で亡くなる方が圧倒的に多くなっています。ところが医療技術が高度に発達した一方で、大切な人を喪った遺族に対して接す

る術のなさが問題として浮上しています。

また関連して、東日本大震災により多くの方が亡くなった事実も、人の死をどう受け止めるのかという問題として、人々の意識にのぼっていると思います。新聞やテレビといったメディアでも遺族の声が度々取り上げられていますが、一例をあげますと、今年の8月にNHKで「亡き人との再会」という番組が放映されました。この番組には震災による津波で家族を亡くした4名の方が登場します。そしてその方達が亡くなったはずの家族に再会した、あるいは故人との触れあいを感じさせる不思議な体験をした、という内容が紹介されました。今その内容にまでは触れませんが、NHKには放送内容を賞賛する声と共に、オカルト的だといった批判も多く寄せられたそうです。公共放送においてこうした内容が放送されたということは、死をいかに受け止め、死者とどう関わりながら生きるべきかといった問いが、社会的に切実さを増している一つの現れではないでしょうか。

○

こうした現状を踏まえて本教の死生観を一瞥しておきますと、次のようになります(①人の死も生と同じく天地の中で起き神の働きの中でのこととしてある、②死ぬことも神のおかげからはずれたことではない、③現世での充実した生が死後の安心につながる、④死んでのち人助けの働きがいよいよ適切にできる)。ご覧の通り「死とはいかなる事態か」「人は死ぬとどうなるのか」といった問い応じるかたちで、生と死を連続するものと捉え、死生の安心に導くように示されています。これは基になる金光大神の「理解」が、生きている人間(参拝者やその家族、あるいは金光大神等)の死を想定して語られたことが大きく関係していると思われます。

もちろんこうした死生観により自分自身の死を思うみならず、家族などを亡くした場面で、人知の及ばない力を感じながら有り難い思いを持ってその死を受け止める人の例は、本教において枚挙に暇がないと思います。しかしその上で、大切な人の死に直面して遺族が抱く悲嘆、その感覚を抱きながらの生き方について思うとき、生と死を連続的に捉える見方では捉えきれない問題もあるのではないかと、思えるのです。私自身の経験、あるいは震災後の社会を見るときに浮かぶ、「人の死生に関して、理屈での割り切りをもっては答えられない問題へと迫る手掛かりはないのか」との思いが、今回の研究を進める原動力と言えます。

二、金光大神における家族の死

以上に述べてきた関心から、私は今回の研究で金光大神が養父親子や子女らを次々に亡くした経験に注目しました。

周知の通り、金光大神は12歳で川手家に養子入りして以降、養父親子(天保7年<1836>)、長男(天保13年<1842>)、長女(嘉永元年<1848>)、二男(嘉永3年<1850>)、そして飼牛2頭(嘉永3、4年(1850、1851))を相次いで亡くしています。そしてこのことは、金光大神によって繰り返し参拝者に語られました。本日はその全てについてお話しすることは出来ませんので、主に夭折した実子たちの死を中心に見ていきたいと思ひます。

○

金光大神が23歳の時、義弟と養父が相次いで死去しています。ともに痢病(赤痢に似

た病気)による死でした。この養父親子の死によって家督を継ぐことになった金光大神は、古川とせと結婚しやがて長男が生まれます。悲しい事の続いた家にとって、子どもの誕生は明るい出来事だったろうと思います。

ところがこの長男は四歳の時に痢病に罹り亡くなりました。実はこの時、金光大神も長男と共に病気に罹りましたが、結果的には長男だけが亡くなり自分は全快しています。この時のことを金光大神は後年、「せがれは十六日朝病死仕り候、四歳にて。私は全快仕り候」(「覚書」2—5)と書き記しています。長男(せがれ)の死と自分の全快とが対比的に捉えられており、ここには、先に2人とも亡くなった養父親子の記憶が残響するなかで、自分と長男のことを記述する金光大神の姿が浮かぶように思います。

その長男が死去してから6年後、今度は生後9ヶ月の長女が急死します。長女は未明に発病して同日の夜に亡くなっているのですが、この時金光大神は医師2人を呼んで治療につとめたといいます。養父親子や長男が病気になったときにも医師を呼んだかどうかは書かれていないので不明ですが、金光大神は病床の長女を前に精一杯の行動に出ています。こうしたこともあり、「医師兩人も薬り(治療し)」(「覚書」2—11、傍点一引用者)といった述懐には、力を尽くしながらも長女が亡くなった事への無念さが滲んでいるのではないのでしょうか。なおここには、講中や親類による祈念が行われたことも併せて記されています。

このように金光大神は相次いで家族を喪ったわけですが、死の連鎖はこれで終わらず、一度は方位家により止められた母屋の普請を敢行する最中に9歳の二男が亡くなっています。この子は、金光大神と2人で金神を避けるために「わたまし」(仮住まい)をしていた時、病気で亡くなりました。金光大神は子どもと行動を共にしながら、結果的にまたも子どもだけを死なせたこととなります。「覚書」には苦しむ二男や慌てる自身、さらに村人や親類による裸参りの様子などまで詳しく書かれています。

○

以上のように見てきますと、養父親子や子どもたちが亡くなった一方で自分が生きることの意味に迫られていた金光大神の様相が、「覚書」の記述となって現れているように思われます。加えて、方位家から止められた普請を行おうとした自分ではなく子どもが亡くなった事実や、それが裸参りといった神との関わりを伴って記述されることから、金光大神は人間の死生というものを神の領域から予感させられていたのではないのでしょうか。しかし問題の渦中であつた金光大神にとって、その神の領域を知る術はありませんでした。

○

ところがその後、安政5年12月24日のお知らせで、家族の死のわけが神から知らされます。その内容を掻い摘んで述べると、①はるか以前に屋敷内に四つ足が埋まっていたことが無礼になり家が絶え、死者が続いた。②神は年忌年ごとに家族を死なせることで金光大神に無礼を知らせようとした。③金光大神の実意丁寧神信心な振る舞いにより、夫婦の命が助けられた、とのことでした。

ここでまず注目したいのは、この知らせにより金光大神は、普請の度に日柄方角を遵守したことが「実意丁寧神信心」と神に認められ、結果的に夫婦の命が救われたことを知らされたことです。補足しておきますと金光大神は家督を相続した後、風呂場や手水場、門納屋、母屋と次々に普請をおこないますが、その度に子女が亡くなっています。これらの

普請に際しては、日柄のみ（風呂場や手水場）、日柄方角（門納屋）、日柄方角の更なる遵守（母屋）を行ったと「覚書」にあります。

ここからは子女の死が重なる中で、金光大神が次第に日柄方角を厳重に守ろうとする様子（実意丁寧神信心）が窺われます。これを逆から見れば、先に亡くなった子どもたちの存在が、金光大神を「実意丁寧神信心」たらしめたこととなります。つまり金光大神夫婦の生が、亡き子どもたちの死と表裏の関係にあることが示唆されます。また更にこのことは、金光大神が生まれる以前から先祖達が亡くなってきた土壌があつてのことだとも分かります。

以上のように金光大神は、死去した子女や先祖達と、生き残った自分たち夫婦との関係に目を向けさせられたと思われまふ。また同時に、神もまた金光大神家族を助けようとしながら、結果的にこの結果に至ったことも知らされています。したがって、養家にまつわる無礼、それを許そうとする神の意志、それらに照らされる家族の死、といった要因が絡み合いつつ辛うじて成り立つ足場に、いま金光大神自身が「ある」ことを知らされたと言えるのではないのでしょうか。それは人間による善悪、禍福といった判断を遙かに超えた地平から自分を見させられる経験だったでしょう。

三、死者と生者 — 「理解」の場面から—

ここまで、金光大神が自分の生と亡き家族達の存在との関係に気付かされた様相を見てみました。ではそのことが実際に金光大神の有り様にどう窺えるのでしょうか。以下、そのことを参拝者とのやりとりに窺います。

○

金光大神が、自身の家族を亡くしたことを参拝者に語った「理解」が幾つか伝えられています（石原銀造、片岡次郎四郎、大喜田喜三郎、他）。ここでは、金光大神が家族の死を背景にしつつ参拝者に語りかけたと考えられる例として、吉原良三の伝える「理解」（理解Ⅱ吉原良三3）を見ていきます。

呉服商を営む吉原家の婿養子だった吉原良三は、妻が重い病に罹ったため金光大神のもとに参拝しました。そのとき金光大神からは妻が全快すると言われたのですが、直後に妻が亡くなり、妻の四十九日が済んだ後には義母までが急死しています。

あまりの出来事に愕然とする吉原は金光大神のもとに出向いたといいます。その時、吉原から「あなたのおっしゃることの、どこを信じてよいかわかりません」とやり場のない怒りをぶつけられた金光大神の様子は、「金光様は赤い顔に筋を浮かべて」いたと描写されます。そしてその金光大神の口から出たのが、「あなたの代わりになる人といえばむずかしいが、あなたの家内になる人は、だれでももらうことができる。まあ、不幸中の幸いと思い、あなたの身代わりになられたらと思つてはどうか」「このうえは、あなたの思いしだいである」というものでした。この言葉に触れた吉原は得心し、以前より熱心に信心するようになったとされます。

○

金光大神と吉原は、家族の死の一方に生きているという事実において同じであります。しかしそうして金光大神の「理解」をよく見ると、「思つてはどうか」「あなたの思いしだい」というように、妻や義母の死を「身代わり」と捉えることについて、最終的には吉

原の考えに委ねる言葉が語られたとされます。ここからは「身代わり」という捉え方が、決して強制できるものではないし、されるべき性質のことでもないことが窺われます。

このことを更に、金光大神が「赤い顔に筋を浮かべて」語った姿から考えると、金光大神自身も我を忘れるような形で、その口から言葉が生まれた様子が浮かびます。それは吉原がこれきりで信心をやめるとしても、何かを言わずにはおけないこととして語られたのではないのでしょうか。その意味でこの「身代わり」とは、金光大神が悟りきった地点から語った言葉とも思われません。むしろ金光大神も吉原に接して、自身にとって掛け替えのない存在としての死者に出会い、その出会いが金光大神をしてこの言葉を語らせたのではないのでしょうか。

この「身代わり」に関しては、他の「理解」において「後々の者がご信心して達者で繁盛せぬと、せっかくの身代わりになった者を犬死にをさしたことになり […]」（尋求教語録36）とも言われます。ここからは金光大神や吉原といった生者の在りようにより、亡くなった家族（死者）の相貌も変わり得ることが示唆されます。そしてこのような死者と生者の関係は両者のみで完結するのではなく、安政5年12月24日のお知らせに窺われたような神の支えがあつてのことだとは言うまでもありません。

四、おわりに

金光大神はその晩年まで、自身の家族を亡くしたことについて、参拝者に語っていたといます。このことは、人間の死生というものが目に見える因果関係に収まり得ないことを神から知らされ、なおかつそれがどこまでも解けない問題であつたからではないのでしょうか。「七墓築いてからの信心は遅いぞ」（理解Ⅲ尋求教語録40）とあるように、人の死とは既に取り返しのつかないことであります。そればかりか生きている者のありようによっては、亡き人を二度死なせるようなことにさえ成りかねません。しかし逆にいえば信心の世界とは、金光大神のもとに参った人々に見られるとおり、その取り返しのつかないところから始まるものでもあるでしょう。

私たちお互いは、今こうしてこの場に参集しているわけですが、その一見何ということのない事実の背後にどういった世界が広がっているのか。改めて考えてみると途方もないようなものがあります。私自身のことで言いますと、冒頭で紹介した従兄がなぜあの時に亡くなったのかという理由は今も分かりません。そういった事実関係はこれからも分かることはないでしょう。しかし少なくとも私がこうした研究を進め、いまこの場で皆さんの前でお話ししている事実の背後に、従兄を含め、私がこれまでに出会い亡くなってきた人の存在があつてこそそのことと感じられます。ここまで見てきた金光大神の経験からは、そうした背後世界からの声に耳を澄ませていくことが、この目に見える世界に生きている人間に求められているように思われます。